

大学生の英語学習における 動機減退要因の予備調査

Keywords

demotivation, amotivation, anxiety, self-efficacy, L2 self 動機減退、無動機、不安、自己効力感、L2セルフ

This research focused on EFL learners' demotivation and investigated what affective factors were related to Japanese EFL learners' demotivation and whether or not English learners' demotivated attitudes were unique to English study. 122 university students completed two self-evaluation questionnaires using Likert scales. Factor analyses were run on the responses, and correlations between factors were examined. One of the resulting factors was amotivation, which positively correlated with an aversion to making an effort, resistance to grammar and vocabulary learning, and anxiety about using English. The results indicated that demotivated English learners tend to make less effort. This likely lowers their competence, which in turn may raise their anxiety of using English. Furthermore, examination of aversions to making an effort implies that demotivated English learners tend to have an insular mentality, and show difficulty in making an effort which was not exclusive to English.

本論では、EFL学習者の「動機減退 (demotivation)」に注目し、どのような要因が英語学習におけるdemotivationと結びついているのか、またdemotivationは英語学習に限ったことなのかを調査した。122名の大学生による2つのアンケート調査の回答を因子分析し、下位尺度間相関を調べた。その結果、特に、「無動機 (amotivation)」要因は「文法・語彙学習への抵抗感」、「努力嫌い」、「英語使用への不安」との間に正の相関が見られた。動機づけの低い学習者は、あまり努力をせず英語の習熟度も低くなりがちで、英語使用への不安や、英語に限らず努力することが苦手だという傾向がみられた。

Preliminary study of demotivating factors in Japanese university English learning

阿川敏恵

恵泉女学園大学

阿部恵美佳

大東文化大学

石塚美佳

東京工科大学

植田麻実

東京工科大学

奥田祥子

大東文化大学

カレイラ順子

東京未来大学

佐野富士子

横浜国立大学

清水順

立教大学

Agawa, Toshie

Keisen University

Abe, Emika

Daito Bunka University

Ishizuka, Mika

Tokyo University of Technology

Ueda, Mami

Tokyo University of Technology

Okuda, Sachiko

Daito Bunka University

Carreira-Matsuzaki, Junko

Tokyo Future University

Sano, Fujiko

Yokohama National University

Shimizu, Sunao

Rikkyo University

背景

第2言語習得 (SLA) の分野において、学習者がいかにして動機づけされるのか、また学習者に本来内在するとされる「学びたい」という動機をどのように伸ばしていくのかということに関する研究は、理論的また実践的にも近年大きく発展してきた。その議論の前提にあるのは、学習者がすでに学ぶ意欲を持っているということである。しかし日本の大学で、特に基礎教育必須科目としての英語学習において教師が直面するのは、英語を学ぶ意欲が見られない学生たちが多く存在しているという現実である。

こうした学ぶ意欲の喪失や減退は、動機の促進という光に対し影のように存在しうるので、demotivationに関しての知見が深まれば、逆に学習者の動機づけに活かせる可能性がある (Zang, 2007) といえる。しかしその要因、解決の糸口などについては、ごく最近まで看過されてきたのが実情である (Dörnyei, 2005)。

学習者が動機を失っていく段階を Nakata (2006) では 1) demotivation, 2) amotivation, 3) learned helplessness とその症状の軽い段階から重い段階へ分類している。最初の段階の demotivation と次の段階の amotivation との違いに関しては、demotivation を元々はあったやる気が何らかのきっかけで減退している、あるいは無くなっている状態とし、amotivation を “a lack of motivation”、すなわち、それまでの経験の積み重ねにより、期待される結果が自分にとって非現実的で、達成能力がないと感じる状態としている。最終段階の learned helplessness は、すべての事に対して無力感にさいなまれて何もやろうとしない状態と分類されている (p.93)。

大学で英語を教えている教師からは、英語学習にみられるやる気の無さは、学習や生活態度全般に及ぶのではないかと、との指摘もある。英語において、予習・復習をすることの大切さを唱えても、そのような習慣が無い場合は定着しづらいのでは、という懸念がある。この場合、教科の学習の根底にある、学習者の demotivation という問題点の共有や包括的な視点の必要性が論じられる。

こうした懸念の裏づけとして、家庭学習全般に関して、その習慣がほとんど無い生徒の割合が、小学校から中学、高校と年を追うごとに大きくなる傾向にあるという報告がある。その報告によれば、小学生では「家庭学習」を「ほとんどしない」割合は3割弱であるが、その比率は中学2年生では6割強、高校2年生では8割近くになる (久富, 2005:148)。そしてこれら高校卒業生の半数以上が大学に進学しているのが現状である。

加えて、学びたいという動機と社会における自分像との関わりに対して、次のような指摘もなされている。「自分はこうありたい」、「こうあるべきである」という自分像が、帰属している社会に存在するか否かによって、そこへ向かう原動力としての学習者の動機と深く関わることである (Higgins, 1998)。日本における英語学習でいえば、こうありたいと望む理想の自分像として、英語を使いこなす未来の自分が社会の中に描けるのであれば、学習者はその自分像を目標点として努力を重ねていくことができる。

Dörnyei and Ushioda (2009) では、学習者のこうした自分像に関して、第2言語という観点から考察を加え、英語という第2言語 (L2) を習得し使うことが自分像に内包されているかどうかを意味する “L2 Self” という概念を提示している。このことは裏返せば、学習者は、英語を習得することが将来あるべき自分の姿に関連が無ければ目標を見失い、学習意欲が失われる可能性がある。

これらを踏まえ本調査のリサーチ・クエスションは、被験者が英語学習の意欲を無くした経験があるのであれば、1) どのような要因が英語学習における demotivation と結びついているのか、そして 2) demotivation は英語学習に限ったことなのか、それともむしろ学習全般や生活態度に関連があることなのか、の2点である。

先行研究 (demotivation)

垣田ほか (1993) は学習意欲を高める要因を3つ挙げている。それによると同じ要因が意欲増進を導いたり、反対

に、意欲喪失の原因になったりするとされている。同様に考えてみれば、意欲減退も同じように大きく3つの要因に分けられよう (p.25)。

1. 環境の要因—社会環境、家庭環境、学校の物理的・精神的雰囲気など
2. 教授の要因—教材、教授法、教授の質 (教育機器、学習形態、授業時数、評価方法など)、教師など
3. 生徒自身の要因—身体的・精神的健康、性格、情緒傾向、知能、適性、興味、態度、英語学習の目的・到達目標、欲求、英語学習背景や英語学習の方法・習慣など

まず、意欲減退を促す学習者の環境として、1) が示すように社会的環境要因をはじめ、家庭的環境要因があると考えられる。社会的環境要因に関しては、以前の日本が外国語能力を全体には求めない社会、すなわち外国語能力は仕事の上で一部の習熟者にとのみ求めるのにとまっていたことがその遠因であったとされる (伊村, 2003:28)。しかし近年、外国語能力 (特に英語力) に対する期待が急速に増し、例えば2006年の経済財政諮問会議ではTOEIC700点以上の取得者の倍増計画が掲げられた。外国語能力習得の重視と目標値への到達が自分の能力では非現実的であるといった心理状態が、英語学習に対する反発につながることもあると考えられよう。

しかし多くの研究が2) の教授による要因を意欲減退の要因としている。特に教師の態度が大きく影響すると結論づけている研究が多い。荒井 (2004) は日本の大学生への調査結果から教師が意欲喪失の要因の50%近くを占めることを指摘したが、その内訳で最も多かったのは、「生徒に対する接し方」で、教師と学習者との間の「十分な意思疎通や信頼関係」の希薄さが意欲減退につながることを示している。Hasegawa (2004) では日本の中学・高校生の英語授業内での意欲減退の要因を調査し、クラスの雰囲気に加え、教師に対する不満がその顕著な要因であるという結果を得ている。Zhang (2007) は日本をはじめ、アメリカ、中国、ドイツの4カ国の大学生への調査を通して、どの国でも共通して教師の態度、特に教授能力の欠如が意欲減退の大きな要因であると述べている。

3) が示す学習者が要因となる意欲減退には、テストの結果の低さ、海外滞在中の不愉快な経験、友人との不愉快なエピソードなどが考えられる。山森 (2004) は定期テスト等の結果に関する自己効力感の欠如などにより意欲が減退することを指摘している。Tsuchiya (2006 a, b) は入学直後の大学1年生129名を成績の高低によって分け、その意欲減退要因を調べ、成績のよい学生では内的な要因よりも外的な要因が意欲減退の要因となり、成績の悪い学生の場合は「自信のなさ」が意欲減退の要因となると述べた。

次の2つは日本人を対象として意欲減退の要因を明らかにすることを試みた最新の研究である。Kikuchi and Sakai (2009) では112名の大学生を対象に高校での英語学習経験についてのアンケート調査を行い、Sakai and Kikuchi (2009) では高校生656名を対象とした意欲減退の研究を行っている。2つの研究では、意欲減退の因子がそれぞれ5つ抽出された。そのうち4つは「不十分な教室設備」、「教師の教授能力と教授スタイル」、「学習内容と教材」、「テストの得点」で両研究に共通しているが、1つのみは異なっており、それは前者では「コミュニケーションではない教授法」、後者では「内発的動機づけの欠如」であ

る。その違いは、前者の大学生を対象とした研究では全ての因子は内発的なものであったのに対し、高校生の場合は、「内発的動機づけの欠如」という内発的な因子があったことである。

上記の荒井 (2004) にも指摘されているように外国語学習における demotivation に関する研究は希少である。そしてそれらの研究は英語の授業における学習者の体験を基に作られ、英語学習に限ったものが多い。本調査では、リサーチ・クエスチョンの1つである、demotivationは英語に限らないのではないか、という英語教師の疑問に関する質問項目を加え、1) や3) などにも及ぶ demotivation 要因についても調査した。

メソッド

参加者は首都圏の3大学に通う122名の1年生-4年生で、うち1年生が大半の69名を占めている(男子32名、女子90名)。ほとんどが文系の学生で、122名中64名は外国語学部などの英語に関連の深い学部生、他の55名はこれらの学部以外の文系学部の学生である。参加者の英語力を知る指標としては英検・TOEFL・TOEICの項目があるが、参加者のほとんどが受験してしたのは英検のみで、準2級取得者が39名と最も多く、次いで3級の33名だった。

リサーチ・メソッドとしては、Dörnyeiの『外国語教育のための質問紙調査入門』(p. 57)をもとに作成した項目をプールし、その中から、英語学習に対しての不安や苦手意識などの情意要因が demotivation と結びつかうことに関する項目をまとめて質問紙1とした。また、学生のやる気の無さは英語に限らないのではないかという疑問に関して、英語学習その他の学習に対する考え方をまとめて質問紙2とした(Appendix)。アンケート調査は秋学期に10分程度の時間を費やして行われた。

これらの項目に、4段階(1. とてもあてはまる-4. 全然あてはまらない)のリッカート・スケールを用いて、参加者に回答してもらった。件数を奇数(5件法など)にすると、あまり考えずに真ん中のカテゴリー「どちらでもない」「中ぐらい」を選ぶ回答者がいると思われるため(Dörnyei, 2003)である。

データはSPSSを用いて因子分析し、下位尺度間相関を調べた(Pearson)。アンケート裏面には自由記述の欄を設け、アンケート項目に挙げられている項目以外で、学生が意欲を無くす原因となったことなどがあれば記入してもらうこととした。自由記述で出された意見については、学習動機減退に関するコメントのみを抽出した。

結果と考察

アンケート回収後、英語学習に対しての不安や苦手意識などの情意に関する質問紙(質問紙1)の10項目と、英語学習その他の学習に対する考え方についての質問紙(質問紙2)の10項目についてそれぞれ主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。2つ以上に負荷する項目、十分な負荷を示さなかった項目を除きながら因子分析を繰り返して、質問紙1では4因子が抽出された(表1)。しかしそのうち1つの因子は、信頼性係数が低かった($\alpha = .28$)ため除いた(表1、第4因子)。残る第1~第3因子の α 係数は、それぞれ $\alpha = .68$ 、 $\alpha = .66$ 、 $\alpha = .62$ と許容できる値が得られたため、それぞれを「英語への苦手意識」、「英語使用への不安」、「文法、語彙学習への抵抗感」と名づけた。同様の手順を踏んで、質問紙2では3因子が抽出された(表2)が、そのうち1つの因子は α 係数が低く($\alpha = .50$)除外した(表

2、第2因子)。残る第1、第3因子についてはそれぞれ $\alpha = .77$ 、 $\alpha = .72$ と、十分な信頼性が得られたため、これらを「無動機」、「努力嫌い」と命名した。最終的に質問紙1と質問紙2をあわせて5因子が抽出されたところで、これら5因子すべてについて下位尺度間相関をみた。その結果、「無動機」、「苦手意識」、「文法、語彙学習への抵抗感」について、他のすべての因子との間に相関がみられた。このうち「無動機」に含まれる項目には、「外国(英語圏も含む)の言語や文化、人に興味がない」、「何のために英語を勉強しているのか分からない」などがある。したがって、この下位尺度得点が低いほど英語学習者は、統合的動機、道具的動機ともに持ち合わせておらず、無動機に近い状態であることを表すと見える。本調査は英語学習者の動機減退に焦点を当てており、動機減退の帰着点である無動機の状態について知することは、動機減退のメカニズムについて知見を得ることにつながると考える。また、分析から「無動機」は他のすべての因子と相関があることが示された。したがって、ここでは「無動機」と他の因子との関連について議論し、これらの因子が動機減退とどのように結びついているかについて考察を加える。

「無動機」は「文法・語彙学習への抵抗感」、「努力嫌い」との間に正の相関(それぞれ $r = .42$, $p < .01$; $r = .28$, $p < .01$)がみられ(表3)、動機づけの低い学生達による、英語学習に向けての取り組み不足が示された。また、「努力嫌い」に含まれる項目は「コツコツと努力することが苦手」と「忍耐力や持続力があまりないと思う」の2つである。このことから、この因子の下位尺度得点が低い者は、英語に限らず、努力や忍耐が要求される物事に取り組むのが苦手だと考えられる。この「努力嫌い」と「無動機」の間に弱い正の相関が見られたことで、英語に対する動機づけの低い学生は、他の教科や日常生活においても、やる気や根気を持って取り組むことができない可能性があることが示唆された。このことは、「家庭学習をしない割合が高校2年生で8割近くに及ぶ」、このリサーチ結果(久富, 2005)とも符合し、こうした教室外での学習状況に関する議論の必要性が示唆された。

さらに、動機づけの低い学習者は英語使用への不安が高い傾向にあることも示された($r = .41$, $p < .01$)。彼らが努力嫌いであったり、文法や単語の学習への抵抗感があったりすることを考え合わせると、動機づけの低い学習者は英語の成績や、ひいては習熟度も低くなりがちだと考えられよう。英語の成績の低い学習者は自己効力感が低い傾向にある(Templin, 1999)ことから、努力不足が自己効力感の低下を介して英語使用の不安に結びついていると考えられることもできよう。山森(2004)は、定期テストの点数の低下が自己効力感の低下をもたらし、それが動機減退につながることを指摘している。本研究では参加者の成績に関する調査は行わなかったが、英語学習への取り組み不足は当然習熟度の低下につながると考えられるため、山森の調査でみられるように、習熟度や成績の低下が自己効力感の低下をひきおこし、動機づけの減退につながっている可能性を示唆できよう。ただし、もともと不安の大きい学習者が、発言の機会の多い英語授業に対して拒否反応を示して英語学習への取り組みを行わなくなるなどという可能性もあり、この点について結論づけるにはさらなる調査が必要である。

これらの結果が示唆しているのは、苦手意識や英語使用に関しての不安をなるべく抱かせないよう自己効力感の低下を招かないような指導の重要性であろう。しかし、単語力や文法の習得が、元来こつこつと努力をした積み重ねによってなされていくことを考慮すれば、教師が学習

者の英語使用に関しての不安を少なくしながら自己効力感を持たせるために孤軍奮闘したとしても、動機減退の打開策を打ち出そうとするのは困難にみえる。また、本調査結果の因子分析により浮上した「無動機」要因から導き出されるのは、学習者における道具的動機の存在の希薄さや、英語を使う自分像“L2 Self” (Dörnyei and Ushioda, 2009) を確立しようとする学習者の姿であり、それはグローバルイズムの潮流とは別のものである。教室を離れた学びのあり方や、学習者の自律的な努力、その積み重ねの上に培われる進歩の実感やその結果向上していく自己効力感の重要性に関しては、今後英語にとどまらぬ教科を超えた連携の必要性が示唆された。

また、荒井 (2004), Hasegawa (2004), Zhang (2007) は、教師の態度が学習者のやる気に大きな影響を及ぼすと主張しているが、今回の自由記述のアンケートで得られた回答の中にも、英語学習者の動機減退の要因が教師にあることを示すものが見られた。例えば、学生の誤りに対して教師から叱責や嘲笑された経験がやる気を無くす要因となったという記述がみられた (2件)。教師の励ましがかえって精神的な負担になる、という記述もみられた (1件)。また、学生自身は進歩したつもりでも、「進歩していない」と教師から指摘されると落胆するという記述があった (1件)。上記のような先行研究の結果や自由記述回答から、学習者の動機づけを構成する要素として教師の態度が含まれる可能性は十分にあると考えられる。今後調査を行う際は、自由記述だけでなくスケール尺度のアンケートにおいても学習動機と教師の関連が示唆されるよう、質問項目を見直すなどの必要がある。

教室で実践するための示唆として、やる気を無くしている英語学習者に対して、授業を自分自身の学びへとどう繋げるかということの指導が望まれる。例えば、予習・復習の積み重ねや、理解できなくとも簡単には諦めないといった学習態度を身につけさせることは肝要であろう。また自国以外の文化や言語に対する興味や関心を抱かせる工夫や、英語の持つlingua francaとしての役割を認識させることも必要であろう。さらに、英語習得に向けて努力することによって、己の内なる国境を超えた社会の中で、自己の存在意義を見つけたり、英語を使うことのできるL2 Selfを確立したりする可能性を示すことも、学習者が学ぶ動機を取り戻すきっかけに繋がるであろう。

結論

以上の結果をまとめると、次のようなことが言える。本研究では動機づけの低い学習者は、努力が苦手で文法・語彙学習への抵抗感があることが示されており、英語学習への取り組み不足が生じていると推測することができる。また、他の教科の学習や日常生活上の困難に対しても、やる気と忍耐力を持って臨むのが苦手なのではないかと考えられる。英語学習においては、この努力不足が習熟度と自己効力感の低下を介し、英語使用の不安に結びついている可能性が示唆される。ただし、因果関係の結論づけにはさらなる分析が必要である。

今回の調査で、因子として抽出されたものの、信頼性係数が低かったためにその後の分析結果の検討から省いたものがあった。また自由記述式アンケートや先行研究の結果から因子の存在が示唆されているものの、4件法アンケートにおいては、因子分析の結果、因子として採用するには至らなかったものもあった。今後、このような結果を

参考に質問項目を見直し、アンケートの改良を行う必要がある。

また下位尺度間の相互相関をみることによって、英語学習者の動機減退と結びついているいくつかの因子間に関連があることが明らかになったが、これらの因子が英語学習への動機減退を引き起こしているのか、逆に英語学習への動機づけが低いことが要因でこれらの因子との相関関係がみられたのか、あるいは双方が影響しあっているのかなどについては、明らかにできなかった。「無動機」は複数の因子との間で相関がみられたため、これらの因子がお互いにどのように影響しあっているのかを探ることによって、大学生の英語学習に対する動機減退の要因を究明することができるかもしれない。この点を今後の研究課題としたい。

注:この調査は科学研究費助成金研究本研究の予備調査として行ったものである。

表1. 質問紙1の因子分析の結果

	1	2	3	4
Q9	.76	.24	.17	.01
Q8	.74	.27	.09	.10
Q17	-.41	.05	.00	-.02
Q10	.13	.67	.11	.39
Q11	.18	.64	.17	.02
Q16	.02	.56	.01	-.06
Q12	.02	.06	.81	.19
Q13	.44	.27	.56	-.10
Q15	-.04	-.05	-.01	.47
Q14	.13	.14	.15	.37

表2. 質問紙2の因子分析の結果

	1	2	3
Q21	.84	-.35	-.08
Q24	.70	-.15	.27
Q20	.50	-.07	.17
Q22	-.49	.47	.01
Q25	.38	-.17	.35
Q23	-.11	.94	-.04
Q18	-.13	.32	-.02
Q26	.06	-.01	.76
Q27	.14	.01	.70

表3. 質問紙1と質問紙2の因子の下位尺度間の相関関係

	苦手意識	不安	文法、語彙学習抵抗	無動機	努力嫌い
苦手意識					
不安	.40**				
文法、語彙学習抵抗	.39**	.30**			
無動機	.33**	.41**	.42**		
努力嫌い	.20*	.15	.43**	.28**	

**p<.01, *p<.05

参考文献

荒井貴和. (2004).「何が外国語学習者のやる気を失わせるか——動機減退の要因とそれに対する学習者の反応に関する質的調査——」、『東洋学園大学紀要』12, 39-47.

伊村元道. (2003).「新しい展望を求めて—ある英語教師の歩み」若林俊輔(編),『昭和50年の英語教育200年』大修館書店 (pp.132-144).

垣田直巳監修. (1993).『英語の学習意欲』英語教育学モノグラフ・シリーズ、大修館書店.

経済財政諮問会議. (2006). Retrieved from <koken.go.jp/nihongo_bt/2006/doukou/sinbun/topic01>.

久富義之. (2005).「学力調査を読み解く」久富義之, 田中孝彦(編),『希望をつむぐ学力』明石書店(pp.137-164).

山森光陽. (2004).「中学校1年生の4月における英語学習に対する意欲はどこまで持続するか」、教育心理学研究』52, 71-82.

Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in second language research: Construction, administration, and processing*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates. [八島智子、竹内理(監訳).(2006).『外国語教育学のための質問紙調査入門』松柏社.]

Dörnyei, Z. (2005). *The Psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Dörnyei, Z., & Ushioda, E. (Eds.) (2009). *Motivation, language identities and the L2 self*. NY: Multilingual Matters.

Hasegawa, A. (2004). Student demotivation in the foreign language classroom. *Takushoku Language Studies*, 12, 119-136.

Higgins, T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, 30, 1-46.

Kikuchi, K., & Sakai, H. (2009). Japanese learners' demotivation to study English: A survey study. *JALT Journal*, 31(2), 183-204.

Nakata, Y. (2006). *Motivation and experience in foreign language learning*. Oxford: Peter Lang.

Sakai, H. & Kikuchi, K. (2009). An analysis of demotivators in the EFL classroom. *System*, 37, 57-69.

Templin, S. A. (1999). The relationship between self-efficacy and language learners' grades. *JALT Journal*, 21(1), 112-124.

Tsuchiya, M. (2006a). Profiling of lower achievement: English learners at college in terms of demotivating factors. *Annual Review of English Language Education in Japan (ARELE)*, 17, 171-180.

Tsuchiya, M. (2006b). Factors in demotivation of lower proficiency English learners at college. 『英語と英語教育』小篠敏明先生退職記念論文集、広島大学学校教育学部英語研究会、87-96.

Zhang, Q. (2007). Teacher Misbehaviors as learning demotivators in college classrooms: A cross-cultural investigation in China, Germany, Japan, and the United States. *Communication Education*, 56(2), 209-227.

Appendix

英語の学習意欲減退に関するアンケート

- 1~7までにはあてはまる番号を、8からは、
1. とてもあてはまる、2.まあ、あてはまる、3.あまりあてはまらない、4.全然あてはまらない、のいずれかを選んでください。
- Q1 性別 1) 男性 2) 女性
- Q2 年齢 1) 18歳 2) 19歳 3) 20歳 4) 21歳
 5) 22歳
- Q3 学年 1) 1年 2) 2年 3) 3年 4) 4年
- Q4 学部 1) 文学部・外国語学部・国際学部など
 2) 1) 以外の文系学部
 3) 理系学部 4) その他
- Q5 英検 1) なし 2) 4級 3) 3級 4) 準2級
 5) 2級 6) 準1級 7) 1級
- Q6 TOEFL 1) なし 2) 250~299 3) 300~349 4) 350~399
 5) 400~449 6) 450~499 7) 500以上

- Q7 TOEIC 1) なし 2) 350未満 3) 350~449
4) 450~549 5) 550~649 6) 650~749
7) 750以上

質問紙1

- Q8 中学の時から英語が苦手だ
Q9 高校入学以降、英語が苦手と感じる
Q10 声に出して発音するのが恥ずかしい
Q11 質問されて答えを間違えるのがいやだ
Q12 単語を覚えるのが面倒だ
Q13 英語の文法がわかりにくくていやだ
Q14 英語を話す自分や顔見知り同士で英語を話すことに違和感を感じる
Q15 クラスの人数が多すぎて、十分練習できない
Q16 クラスの人数が少なすぎて、すぐに質問がまわってくるのがいやだ
Q17 先生が励ましてくれたり、がんばった時に認めてくれると、やる気がおこる

質問紙2

- Q18 先生が自分の英語の進歩した程度をいってくれるとやる気がおこる。
Q19 自分には語学のセンスがある
Q20 外国語(英語も含む)の言語や文化、人に興味がな
い
Q21 英語を勉強しても、どうせ一生使わないですむと思
う
Q22 英語を身につけることは重要で将来役にたつと思
う
Q23 英語の勉強は、自分の成長につながる(例:忍耐力
を養う)
Q24 何のために英語を勉強しているのか分からない
Q25 英語そのものに興味が無いし予習復習する習慣も
あまりない
Q26 コツコツ努力することが苦手だ
Q27 忍耐力や、持続力があまりないと思う

裏面:自由記述:

項目に関してのコメントなどを書いてください。

JALT College and University Educators (CUE-SIG) 2011 Conference

Foreign Language Motivation in Japan

July 1-3, 2011 at Toyo Gakuen University, Hongo Campus (Tokyo)



EMA USHIODA
University of Warwick

Your *CUE* for motivation!



KIMBERLY NOELS
University of Alberta

Featured Presenters:

Tomohito Hiromori, Keita Kikuchi, Yoshiyuki Nakata, & Tomoko Yashima

Abstract Submission Deadline: January 31, 2011

Co-sponsored by CUE SIG and JALT West Tokyo

www.cue2011conference.org / twitter.com/jaltcue

Visited TLT's website recently?

<tlt.jalt-publications.org>